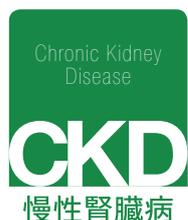


取材日：2019年5月28日



腎臓内科と代謝・膠原病内科が タッグを組み腎糖尿病チームを結成。

Point of View

- ① 「笑いあふれる透析センター」をキャッチフレーズに掲げ、患者が楽しみながら学べる透析教室を開催
- ② 腎臓内科と代謝・膠原病内科の併診を基本とし、関連するメディカルスタッフとともに腎糖尿病チームを結成
- ③ かかりつけ医の要望に応じた柔軟な病診連携を実施。治療後の逆紹介の時期などを事前に取り決め、かかりつけ医との確固たる信頼関係を構築

社会医療法人同仁会耳原総合病院
腎臓内科学部長／腎センター長

大矢 麻耶先生

社会医療法人同仁会耳原総合病院
代謝・膠原病内科医長

岩崎 桂子先生

社会医療法人同仁会耳原総合病院
栄養管理科主任
管理栄養士

梁 晶子氏

社会医療法人同仁会耳原総合病院
臨床工学科主任
臨床工学技士

宮野 伸也氏

社会医療法人同仁会みみはら高砂クリニック
健康増進室
健康運動指導士

本部 勇地氏

患者に安心感を与える 総合病院ならではの透析

大阪府堺市に所在する耳原総合病院の腎臓内科／腎センターのウェブサイトには、「南大阪随一の血液透析センターを有する」との表記が見られる。

その意図を腎臓内科学部長／腎センター長の矢野先生に尋ねると、次のように説明してくれた。

「周辺には当院と同程度の規模の透析設備を持つ医療機関はほかにもあり、『南大阪随一』とは、規模の大きさを指すものではありません。

当院の血液透析センター（【資料1】）が、透析だけではなく総合病

院という利点を生かし、腎臓内科と代謝・膠原病内科がタッグを組み、透析移行前の慢性腎臓病（CKD）早期から透析導入、維持透析まで、さまざまな段階にある患者さんの治療にたずさわっている特徴を表現するため『南大阪随一』という言葉を使っています」（大矢先生）

たとえば、透析導入に関しては、不安を抱く患者も多いだろう。しかし、それ以前から診ていた代謝・膠原病内科医が親身になって相談に乗り、同時に腎臓内科医が適切なアドバイスをくれたなら、安心して透析導入を受け入れられるに違いない。このような対応ができる同院の血液



左から大矢先生、岩崎先生、梁氏、宮野氏、本部氏

透析センターの存在は、間違いなく「随一」と表現するのにふさわしいと感じた。

【資料1】

耳原総合病院の血液透析センター

「笑いあふれる透析センター」をキャッチフレーズに掲げて

さらに同ウェブサイトで、見逃してはならないのが、「笑いあふれる透析センター」との文言である。「患者さんは、どうしても透析に悪いイメージを抱きがちなので、それを払拭したいと思い、キャッチフレーズとして『笑いあふれる透析センター』を掲げました」（大矢先生）

もちろん、キャッチフレーズを掲げたからには、その思いを具現化するために、さまざまな活動を展開している。

大矢先生が、「笑いあふれる透析センター」実現のために手がけている代表例は、多くの患者が楽しんで参加できるよう工夫された透析教室の開催だろう。

「当初は、一般的な講義形式の透析教室を開いていました。けれども一方的な講演で、ただただ聞くだけの患者さんには、あまり評判はよくありませんでした。

そこで、より患者さんに意欲的に学んでもらえる機会とするにはどうすればいいのかと試行錯誤を繰り返し、2年ほど前から、メディカルスタッフが中心となって、座学と患者さんが参加するイベントを組み合わせ



出典：耳原総合病院提供資料

せた透析教室を開いています」（大矢先生）

メディカルスタッフが各々にユニークなイベントを企画

イベントの内容は透析センターのスタッフ全員で考えているそうだ。具体的にどのようなイベントを開催しているのかを尋ねた。

耳原総合病院の外来機能の一端を担う、みみはら高砂クリニック健康増進室の健康運動指導士である本部氏がイベントとして企画したのは、「運動会」（【資料2】）である。

「患者さんの選手宣誓から始まり、座ってできる玉入れやボール運び、借り物競走などの競技を行い、患者さんはもちろん、我々も一緒になって大いに盛り上がりました。

参加した患者さんか

らは、『もっと活躍できるように体を鍛えておくれ』、『次も選手宣誓を読みたいので、元気でいられるようにがんばります』といった感想をいただきました」（本部氏）

透析患者は運動不足になりがちだが、安心して楽しみながら身体を動かすことを体験することによって自信を持ち、運動へのモチベーションが高まった様子だという。

臨床工学科主任で臨床工学技士の宮野氏は、「カラオケ大会」を実施した。

「透析教室では、シャントの管理を学んでいただくための講義を開いていたのですが、内容が難しく、患者さんの理解度を上げるのは、なかなかたいへんでした。

どうすべきかと思案していたところ、ある患者さんから『カラオケがしたい』との声を聞いて、ひらめきました。勉強と“カラオケ大会”、つまり、学びと楽しみをセットにした透析教室を思いついたのです。



【資料2】

“運動会”型の透析教室

楽しいカラオケが待っていると思うと、患者さんの学ぼうとする姿勢は自然と意欲的になり、透析生活を送るのに重要な知識を得られるとともに、楽しんでもいただけるので、患者さんからは、またやってほしいと好評でした」(宮野氏)

職種ごとにブースを設けて催しを開いたイベントで、わかりやすい栄養指導を行ったのは、栄養管理科主任で管理栄養士の梁氏。「管理栄養士は、患者さんにみそ汁を飲みくらべしていただくブースを開設しました。

用意したのは、濃度の違う3種類のみそ汁。実際に試飲した患者さんからは、『塩分が薄くても、意外においしくて気にならない』といった反応があるなど、減塩に対するイメージを変えていただける場になりました。さらに、塩分と水分管理の理解につなげるために、塩分量ごとにあとで飲みたくなる水分量をペットボトルで展示しました」(梁氏)



メディカルスタッフの講演の後、運動会を開催



競技開始前の選手宣誓



種目のひとつとして行われた借り物競走



メディカルスタッフによる応援

出典：耳原総合病院提供資料

透析予防に向けても医師と メディカルスタッフが奮闘

耳原総合病院の透析指導は、患者の積極的な参加を誘う工夫がこらされている点でたいへん秀逸だが、もちろん同院では、その前の「透析に進ませない」診療においても十分に力を尽くす。

糖尿病を診療しつつ、糖尿病性腎症重症化予防に取り組む、代謝・膠原病内科医長の岩崎先生が語る。「糖尿病性腎症重症化予防の基本は血糖コントロールに尽きます。そこで、外来管理と糖尿病教育入院によって血糖コントロールの安定と維持に努めています」(岩崎先生)

メディカルスタッフたちは、腎症重症化予防においても頼もしい。

「たとえば、糖尿病教育入院中、野菜を使った簡単な調理実習を行い、普段、料理をしない男性患者にも意外と手軽にできることを体験していただいています」(梁氏)

「健康運動指導士は、患者さんが外来診療を待っている時間などを使って、体成分分析装置で筋肉量や体脂肪、浮腫量を測定し、筋肉量の増減を確認しながら運動や日常生活に対する動機づけを行っています」(本部氏)

2つの診療科がタッグを組み 腎糖尿病チームとして活動

代謝・膠原病内科で、血糖コントロールの努力を続けても、病状が進捗すれば透析への移行が視野に入

てくる。この場面で、同院で特徴的なのが、冒頭でも触れた腎臓内科と代謝・膠原病内科がタッグを組んだ診療である。

「血清クレアチニン値が3～4 mg/dLになると、透析導入に備え、代謝・膠原病内科から腎臓内科に患者さんを紹介するのですが、両科の業務はオーバーラップしており、役割分担に明確な線引きはなく、併診が行われます」(岩崎先生)

2つの診療科での併診の詳細に関して、岩崎先生と大矢先生が具体的に解説する。

「実は、私は透析を手がけますので大矢先生が患者さんにシャント造設のうえ透析導入をされた後、私が維持透析をするケースもあります。一方、大矢先生も糖尿病の知見をお持

ちなので、軽症患者であれば、薬剤の処方を考えていただく場合があります。

病棟が同じことも幸いし、病状の進行度合いによって両科のかかわりの比重を変えつつ、きめ細かくひとりの患者さんを診続けていくスタイルをとっています」(岩崎先生)

「糖尿病の患者さんは、治療が長期間に及ぶので、岩崎先生をはじめとした代謝・膠原病内科の医師にずっとかかっているらしいです。

ですから、透析を導入したからといって、突然、腎臓内科に全面移行してしまったら患者さんは不安になるでしょう。併診は、患者さんの不安を少しでも軽くする意味でも、とても有効です」(大矢先生)

こうした2診療科がタッグを組んだ診療に、院内ではいつしか名前がつけられたという。

「関連するメディカルスタッフも含め、我々は、『腎糖尿病チーム』と呼ばれるようになりました。とてもうれしいことと受け止めています」(岩崎先生)

確固たる信念を持ち かかりつけ医の信頼を獲得

柔軟に連携し充実したチーム医療を展開する腎臓内科と代謝・膠原病内科だが、院外の医療機関との連携もまたフレキシブルだ。

まず、地域のかかりつけ医から糖尿病患者の紹介を受ける際の対応について岩崎先生が話す。

「患者さんの紹介内容も、紹介元のかかりつけの先生のご要望も実にさまざまです。

したがって、いわゆる地域連携パスに乗せるのではなく、かかりつけの先生方からの紹介状をベースに、最適と思われる連携のかたちを臨機

応変にとっています」(岩崎先生)

患者の状態や、かかりつけ医の要望にケースバイケースで対応する岩崎先生だが、病状に問題がなければ必ずかかりつけ医に戻すことだけは守っていると言う。

「紹介患者が引き続き当院での治療を望まれたとして、それを受け入れてしまえば、せっかく構築してきたかかりつけの先生との信頼関係が壊れてしまいます。

です。患者さんをご紹介いただく際には、まず、かかりつけの先生のご意向をうかがい、たとえば、『血糖コントロールが順調に進み、HbA1cが6%台に下がったら、逆紹介でお戻りいただく』といった取り決めを交わします。そして、患者さんにも最初にその旨をお伝えし、ご理解いただくようにしています」(岩崎先生)

ここまで徹底していれば、かかりつけ医との信頼関係は、さぞ強固であることは想像に難くない。岩崎先生の姿勢には感心するばかりだ。

一方、大矢先生は、メディカルスタッフの育成を進めるべく、地域の医療機関と連携した活動をスタートしている。

「糖尿病性腎症重症化予防においては、メディカルスタッフが大きな役割を果たします。そこで今、かかりつけの先生方とともに、地域の医療機関に所属するメディカルスタッフの皆さんを対象に、聴講するだけでなくディスカッションも行うような勉強会の実現に向けて動いているところです」(大矢先生)

院内外で連携を深めて 糖尿病性腎症重症化予防を

大矢先生と岩崎先生は、今後の糖尿病性腎症重症化予防に対して、ど

のような考えを持って臨もうとしているのだろうか。

「糖尿病性腎症の重症化予防はもちろん、糖尿病の悪化を防止するにも患者さんの生活習慣から包括的に診ていかなければなりません。そのために、メディカルスタッフと十分にコミュニケーションをとり、ときにはアイデアを出し合いながら、患者さんが取り組みやすく、また、継続しやすい、食事療法や運動療法などを考案していくつもりです」(岩崎先生)

「地域全体で糖尿病性腎症の重症化予防をさらに進めるには、糖尿病への早期からの介入が必須で、それには地域のかかりつけの先生方との協働が不可欠です。現在でも病診連携はうまくいっていますが、甘んじることなく、よりいっそうスムーズな連携ができるように関係を深めたいと思っています。

加えて透析を受けるようになってしまった患者さんに対しては『笑いあふれる透析センター』に親しみ、前向きに治療を受けていただけるような施策を、もっと追求していきたいですね」(大矢先生)

透析そのものはもちろんのこと、その前後でも果敢な挑戦を続ける耳原総合病院の腎糖尿病チームに、今後も要注目だ。

社会医療法人同仁会 耳原総合病院

〒590-8505
大阪府堺市堺区協和町4-465
TEL: 072-241-0501

社会医療法人同仁会 みみはら高砂クリニック

〒590-0820
大阪府堺市堺区高砂町4-109-2
TEL: 072-241-4990